

氏 名	中 澤 謙		
学位の種類	博士（保健学）		
学位記番号	甲第45号		
学位授与の日付	2018年9月26日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	Formation of students' perceptions of physical education 大学体育の教材特性と授業改善に関する研究		
論文審査員	主査	新潟医療福祉大学	教授 西原 康 行
	副査	新潟医療福祉大学	教授 能 登 真 一
	副査	新潟医療福祉大学	教授 渡 邊 敏 文

論文内容の要旨

本論文は、大学体育授業における教材特性を授業実態から明らかにするとともに、教師の授業の改善を試みた論文である。具体的には、学生の授業記述をテキストマイニング法を用いて分析し、教材特性を検証した。これに基づきオンゴーイング法と授業日誌法を併用し、教員の授業改善を試みた。以下に本研究の概要を述べる。

【目 的】

体育のカリキュラムの目標は、身体と自己に関連する認知的・社会的スキルの発達にある。大学体育においても、当該大学のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーに沿って、教員は体育のこうしたカリキュラムの目標に基づき授業設計（デザイン）をしている。また、体育のカリキュラムの目標を達成するためには、授業を継続的に改善していく必要がある。教員が自らの授業実践を対象に言語化を通して改善を促す方法として、省察過程を扱うリフレクティブアプローチがある。授業を改善するには、自らの教授活動を対象とした省察に基づき学習内容を習得するための手段となる教材を見直し、授業を再設計（リデザイン）していくことが有効である。さらに、教材を見直すには学習者である学生が授業や教材をどのように認知したのかを考慮することが不可欠である。そこで本研究では、大学の体育授業において教員がデザインし授業で用いた教材の特徴を、学生がどのように捉えたのかを授業実態の側面から検証し、これに基づく授業改善過程をリフレクティブアプローチにより明示化することを目的とした。

【方 法】

対象は1年生であり、一般教養体育授業を授業対象とした。前年度の実態を踏まえ、漸進的に身体活動量を増やすとともに、大学生活への適応を図るために相互の関係が構築されることを念頭に置いた単元構成とした。具体的には、最初にネット型で対人スポーツのバドミントン、次に同じくネット型で集団スポーツのバレーボール、最後にゴール型で集団スポーツのバスケットボールの順序で3つの単元教材を配置した。全授業終了後、学生による授業実態に関する記述から3つの単元教材及び授

業全体の特徴を検証するために、3つの単元教材に授業全体を加えた4つのカテゴリについての学生による記述に対して計量テキスト分析を行った。最初に、それぞれの単元に共通な頻出語を抽出し、これを手掛かりとして体育の授業と関わりの深い言葉をまとめ8つのコードを作成した。次に、4つのカテゴリにおけるコードの出現数と非出現数の隔たりを確認するためにクロス表を作成し、カイ二乗検定を行った。その結果、全てのコードにおいてカテゴリ間に有意差が認められたことから、カテゴリ間の差異を確認するため残差分析を行った。

授業改善の過程は、オンゴーイング法により音声で記録した教員の授業実践中の認知過程と、授業日誌法により授業後に捉え直した授業認知過程を整理分析し、その過程を捉えた。

【結果と考察】

バドミントン単元は、「ゲーム」のコードのみ出現率が他のカテゴリよりも高い傾向にあった。入学間もない時期であり、学生相互の親密な関係が未構築であることが反映していると解釈された。次のバレーボール単元は「集団凝集性」「教材」「技能」「相互作用」のコードの出現率が他のカテゴリより高い傾向にあった。バレーボール単元を通して学生間のコミュニケーションが活性化し、集団凝集性が促進されたと解釈された。最後に配置したバスケットボール単元は「技能」と「教材」のコードの出現率が他のカテゴリより高い傾向にあった。バレーボール単元で構築された集団凝集性を基礎として技能への関与の高まりが構築されたと解釈された。授業全体のカテゴリで出現率が高い傾向にあったのは、「相互作用」「ポジティブな感情」のコードであった。授業全体のカテゴリで示された学生の肯定的な授業記述は、配置された教材単元で示された特徴的な学習内容を通して形成されたことが示唆された。

教員の授業認知の側面から授業改善を試みた結果、授業省察により教員の学生の姿・授業技能に対応する認知の枠組みが修正されていく過程が示された。初期のバドミントンの単元では説明時間の短縮、バレーボール単元では肯定的なフィードバックの徹底、バスケットの単元では役割・基準の明示化が改善の手立てとして用いられたことが示された。

本論文において明示化された教材の特性は、学生の実態に即して授業を再設計するのに有効である。また、教員の省察過程は自らの教授活動を客観視し、授業を再設計するのに役立つ。しかしながら本研究は学生及び授業者自身による授業認知過程を取り扱っていることから、授業者としての他者（メンター）の経験を踏まえた省察による学びには繋がらず、そこが本研究の限界であると思われる。

キーワード：大学体育、教材、省察、授業改善、リフレクティブアプローチ

論文審査結果の要旨

<論文概要>

本論文は、大学体育授業における教材特性を授業実態から明らかにするとともに、教師の授業の改善を試みた論文である。具体的には、学生の授業記述をテキストマイニング法によって分析し、教材特性を検証するとともに、オンゴーイング法と授業日誌法を併用し、教師の授業改善を試みている。

結果として、各単元の特徴が顕著に明らかとなった。バドミントン単元では、「ゲーム」において

出現率が他のカテゴリよりも高い傾向にあり、入学間もない時期の学生相互の親密な関係が未構築であることが反映していると解釈された。バレーボール単元では「集団凝集性」「教材」「技能」「相互作用」の出現率が他のカテゴリより高い傾向にあった。このことから、バレーボールは単元を通して学生間のコミュニケーションが活性化して、集団凝集性が促進されたと解釈された。バスケットボール単元では、「技能」と「教材」の出現率が他のカテゴリより高い傾向にあり、バレーボール単元で構築された集団凝集性を基礎として技能への関与の高まりが構築されたと解釈された。授業全体のカテゴリで出現率が高い傾向にあったのは、「相互作用」「ポジティブな感情」であった。授業全体のカテゴリで示された学生の肯定的な授業記述は、配置された教材単元で示された特徴的な学習内容を通して形成されたことが示唆されている。

次に教師の授業認知の側面から授業改善を試みた結果、授業の省察により、教師が学生の姿や授業技能に対応する認知の枠組みが修正されていく過程が示された。初期のバドミントンの単元では説明時間の短縮、バレーボール単元では肯定的なフィードバックの徹底、バスケットの単元では役割・基準の明示化が改善の手立てとして用いられたことが示された。

以上の結果から、本論文において明示化された教材の特性は、学生の実態に即して授業を設計する学習過程の構築に有効であることが示唆された。また、教師の省察過程は自らの教授活動を客観視し、授業を再構築するために役立つ。しかしながら、本研究は学生及び授業者自身による授業認知過程を取り扱っていることから、授業者としての他者（メンター）の経験を踏まえた省察による学びには繋がらず、それが本研究の限界であると考えられる。

<論文の特徴及び評価できる点>

本論文は、1) 大学体育において教材特性を学習者の授業実態から明らかにする研究がこれまでにない、2) 大学教員が自らの授業を振り返る省察を行ないながら、授業改善を試みる取り組みがこれまでにない、3) オンゴーイング法と授業日誌法を併用した取り組みがこれまでにない、という3点を試みたことに研究の新規性がある。また、特に1)の大学体育において教材特性を学習者の授業実態から明らかにする研究がこれまでにないため、教材特性を明らかにしたうえで、学習過程（カリキュラム）を実際に設定した上で、オンゴーイング法と授業日誌法の併用によって授業改善を試み、その成果が上がったことから、大学体育に有効な教材設定や、有効な教師の省察の手法を確立したと言える。

<指摘事項、回答及び今後の課題>

1) 授業は、「目標」と「内容」「評価」によって構成されているが、本授業の「目標」が「内容」「評価」にどのように結び付いているのか。

【回答】

本研究の対象は、工学系大学の体育授業であることから、体育によってコミュニケーション力をつけることを第一義の目標に設定している。そのため、本研究で得た教材特性は「目標」「内容」に結びつく知見であると解釈する。ただし「評価」については、エビデンスが無いため、本研究の限界および今後の課題に位置づける。

2) 本研究で扱う「バドミントン」「バレーボール」「バスケットボール」は初めから用意されていた教材であるのか、あるいは仮説的に設定した教材であるのか。

【回 答】

他に多くの教材（種目）が考えられるが、対象となる大学の都合で「バドミントン」「バレーボール」「バスケットボール」に限定されている。ただし、この3教材をどの順番で行なうのかという学習過程は、仮説として設定した。今後は他の種目でも検証を行なっていく。また、教育現場での研究であることから倫理的にコントロール群と非コントロール群の比較ができないことが教育研究の限界である。

以上のことから、審査委員会は本論文を博士論文に相応しいと認める。